Jazz Interview Vol.38

日本が誇る天才ジャズ・ピアニスト＆“ミスター・ピアノ”

菅野邦彦【Kunihiko Sugano】

本誌由来のジャズ・ベースマン、リロイ・ヴィネガーとレコーディングした唯一の日本人ジャズ・ピアニストでもある菅野邦彦さん。静岡県下田にある『下田ビューホテル』を拠点に、自身が発案した“未来鍵盤”を演奏しながら、喜寿を迎えた現在も音楽に人生を掛け、精力的にライヴ活動を続けている日本が誇る天才ジャズ・ピアニストだ。

今回のインタビューで知ったあのビートルズとの接点…。その他にも貴重な話をたくさん聞かせて頂いた。今でも演奏中に急に怖くなる時があり、自分の演奏に満足がいかず、悔しいと弾くのを止められなくなるとも語ってくれた。そして、「世の中で僕が一番ピアノを触ったやつじゃないかな」という言葉には、人生の重みだけでなく、ピアニストとしての誇りを感じる。その生き様と佇まいは、正に“ミスター・ピアノ”！

2014 年 7 月 26 日（土）『ハイハット』にて

【取材・文：加瀬正之／取材協力：ハイハット】

ダンディな菅野さんと本誌 BN 表紙のリロイさん＆中村照夫さんの 3 ショットが実現

♪まずは菅野さんが発案された“未来鍵盤”について聞かせて下さい。

メカニック的な話になってしまいますけど、例えば、パソコンで「菅野邦彦です。元気ですか」ってキーボードを打つのと 12 音階あるピアノ、つまり音楽が 12 通りあるのと同じなんです。それだけなわけです。パソコンのキーボードは凸凹していますけど、ピアニストでもないのに 50 音も扱っているんです。しかも、それを英語で解釈したりしていますよね。皆さんがパソコンでスムースに文字を打てるのは、キーボードが平らで重さが均等だからなんです。ピアノというのは鍵盤がシーソーにようにできていますから、白鍵も黒鍵も重さが同じですけど、奥の方に行くほどだんだん重くなっていくんです。黒鍵は白鍵よりも位置が奥の方にありますし、鍵盤の重さもあって、弾いているとつかえてしまうんですよね。だから、ピアノは弾けないけどキーボードを操作することができるように、パソコンの感覚でピアノを弾く練習ができるような、本来ピアノもそうあるべきだと思ったんです。鍵盤に重さがあって、凸凹しているのは大変なんじゃないか、鍵盤が平らであればいいんじゃないかと思って、“未来鍵盤”を発案したわけなんです。

♪“未来鍵盤”は子供たちやピアノ初心者の方にも優しい楽器なのですね？

そうなんです。“未来鍵盤”は皆さんでも直ぐに弾けますよ。音楽の理論を説明する時に必ずピアノが出て来ますよね？　ギターではないですよね？　ピアノは“楽器の王様”って言われますけど、それを弾きこなすまでに手こずってしまうんですよね。ピアノや音楽を遠まわしに難しく、難しく、子供たちや初心者に教えるわけですよ。最初からコードが出て来てしまって、1 人で 3 つも 4 つも鍵盤を押さえるというのは大変なことなんですよ。ピアノを演奏することはもっと楽であるべきだと思うんですよね。そういうことがあって、転調してもそのままの運指で演奏できて、黒鍵と白鍵の段差のない平らな鍵盤で、より自由な演奏ができるような今までの「常識」を覆す新しいピアノの形を作ったんです。今、“未来鍵盤”は僕が演奏している『下田ビューホテル』にある 1 台だけなんです。ものすごく音がいいんですよ。ぜひ皆さんに生の音を聴いてみて欲しいですね。

♪“未来鍵盤”でのアルバム制作の予定はありますか？

協力して頂けるスポンサーがいたらぜひ作りたいですね。ちょうど日本で良いアナログの機材を探している所なんです。

♪菅野さんはエロール・ガーナーに影響を受けたそうですが、他に影響を受けたピアニストはいますか？

エロール・ガーナーの影響を受けている人が大好きで、ウィントン・ケリーやフィニアス・ニューボーン・ジュニアですね。僕は“音楽”自体が大好きなので、黒人、白人というのは特に関係ないんですけど、白人ではアンドレ・プレヴィンとジョン・ウィリアムスがいいですね。

♪今注目している日本人ジャズ・ピアニストはいますか？

北海道で活動している有本紀さんや九州の岩崎大輔さん。本田富士旺さんなんかもいいですよね。それから、何といっても京都の藤井貞泰さんはいいですね～。日本でも結構いいピアニストがたくさん出てきていますよね。

♪日本人ジャズ・ベーシストの中で、これは凄いというベーシストを挙げてもらえますか？

一番凄いと思ったのは本田英造という人ですね。あと、ニューヨークで活動している中村照夫、あのベースはいいですよ。あと、高梨道生もいいベースを弾きますね。それから、河上修さんや小林陽一さんっていうベーシストも味があると思います。日本にも素晴らしいベーシストがたくさんいますよね。

♪本誌由来のジャズ・ベースマン、リロイ・ヴィネガーとの共演について聞かせて下さい。

1989 年にニューヨークで録音した僕のアルバム『エスタテ』で共演させて頂きましたが、あの時は 3 日間くらいしか休みがない中でニューヨークに飛んで、到着したその日にレコーディングして、直ぐに日本にトンボ帰りという状況だったんです。経由地のハワイからニューヨークに到着した時はフラフラで、浮遊しているような状態だったんですよ（笑）。それで、リロイ・ヴィネガーさんとお会いして、ゆっくりコミュニケーションを取ったり、お食事もできない状況でレコーディングに入ったので大変でしたけど、リロイさんもウエスト・コーストの方から来ていましたし、めったにニューヨークに来る人ではなかったですからね。皆さん素晴らしいメンバーで、ドラムはブルーノ・カーさんでしたね。リロイさんは当時肺が悪かったんだと思いますけど、素晴らしいウィーキングでした。プロデューサーでベースでも参加した中村照夫とも、このアルバムが 1 発目で次にまた何かやろうと話していたら、（1999 年に）リロイさんが亡くなってしまったんです。そのことはとても悔やまれますね。

♪ベーシストだったクレイジー・キャッツの犬塚弘さんやドリフターズのいかりや長介さんとは共演されましたか？

犬塚さんは僕が湯河原の『檜ホール』でライヴをした時に見に来てくれたんです。その時に犬塚さんに「1 曲弾きませんか？」って言ったんですけど、丁重にお断りされてしまいましたね。ハナちゃん（ハナ肇）も石橋さん（石橋エータロー）も桜井さん（桜井センリ）もよく知っていますけど、クレイジー・キャッツのメンバーで今でも元気なのは犬塚さんだけですよね…。いかりやさんと言えば、彼は 1 番のベーシストかもしれませんよ。いかりやさんとは 1 回か 2 回遊びで共演していると思います。いいベーシストでした。

♪ところで、菅野さんはあのビートルズとも接点があったそうですね？

ビートルズが来日していた時に、ちょうど僕も彼らが滞在していた『東京ヒルトンホテル』でソロ・ピアノでのレギュラーの仕事が入っていて、「ティー・ラウンジ」や「李白 Bar（リポ・バー）」で演奏していたんです。彼らは外に出るとファンの女の子たちに囲まれてしまうので、1 週間ホテルに缶詰状態だったんです。その時に僕のピアノを聴きに来たんです。僕は「イエスタデイ」は知っていましたので、「イエスタデイ」を弾いてあげたらとても喜んでくれましてね。「どうやって覚えたの？」って聞かれたので、「1 回聴いて覚えました」って言ったら驚いていましたね。ジョン・レノンなんかも喜んでくれて、「『ダニーボーイ』は弾けるか？」と言われて弾いてあげたことを覚えています。4 人とも凄くいい匂いがしましてね。ネクタイもして清潔感があって、「この人たち素晴らしいじゃない！」と好印象を持ちましたけど、最初は「こ

の人たち何なんだろう？」って思ったんですよ（笑）。目の前に 4 人が並んで立ったんですけど、みんな髪が長いでしょ？　髪の毛がワァーって 4 本立っていた感じでね（笑）。1 週間の滞在中に彼らとコミュニケーションしましたけど、日本武道館で演奏をすることをすごく恐れおののいてもいましたね。今ではとても懐かしい思い出です。

♪1972 年に一時ピアノをやめられて、ブラジルに渡った時はいかがでしたか？

若い頃に『夢で逢いましょう』等、いろいろなテレビ番組に出たり、伝説的な存在だった松本英彦カルテットでも演奏したりと、一応日本で頂点を極めたバンドだったんですよ。なので、一通りここでもって区切りが付いたからピアノをやめようと思ったんです。それで、南米でカレーライス屋をやろうと思いましてね（笑）。ブラジルに渡った後に僕のオリジナルのカレーをブラジルの友達や料理家の連中にも食べさせたら、「美味しい、美味しい」ってみんな僕のカレーをとても気に入ってくれたんです。そしたら、コパカバーナの海岸で知り合った日本人がカレーのお店をやりたいっていうんですよ。それで僕が作り方を教えてあげたり、パンを作ったりして店を始めたんです。あっという間に行列になっちゃいましてね。その後、1、2 ヵ月経っても連絡が来ないので、きっと大儲けしてニコニコしながら誰か他の人に経営を任せているのかなと思ったんです。でも、あんまり心配だから店に行ってみたら、外にお客さんの行列ができてはいるんですけど、その日本人のオーナーがレジで暗い顔をして落ち込んでいましてね。話を聞くと、トイレに行っている間に勝手に男たちが入って来て、お金を持って行っちゃうって言うんですよ。最初はブラジル人がマネージャーをしていたんですけど、それがものすごく悪くて、勝手に内装を取り換えちゃたり、余計なものを仕入れたりして、ひどい状態になっちゃってましてね。それから、日系人のマネージャーを雇ったら、それがまたとんでもない男で、結局 3 か月営業して、お客さんはたくさんいるんですけど、店は大赤字…。そんな国といいますか、南米はとにかく大変だったんですよ。向うにはいい音楽や素敵なメロディがたくさんあるんですけどね（笑）。でも、当時ピアノをやめようと思ってブラジルに渡ったことが、今現在に通じる第一歩でしたからね。

♪南米では UFO にも遭遇されたそうですね？

僕の親友に矢追純一っていう男がいるんですけど、昔、僕と矢追さんも出ていた『11PM』というテレビ番組がありまして、そこでも UFO のことを話したことがあるんですけどね。僕もカリブの島で UFO を見ました。色は透明で、大きさは直径 1 キロくらいですかね。母船っていうのかな、メカニックを動かしている小さな人がいるような、いないような感じに見えたんです。今では嘘みたいな話になってしまっていて、あまり実感がないんですけどね。でも、今でも確実に覚えているのは、ヤシの葉っぱが全部逆立って、何だろうって上を見たら、ちょうど大きな物体がスーと上空に上がって行くところだったんです。辺りにものすごい風が舞って、僕たちは溺れそうになったんですよ。そんな情景って台風でもないでしょ？　そのものすごい大きな物体は上空に上がって行って見えなくなってしまったんです。

♪ジャズ・ミュージシャンとして大事なことは何ですか？

僕なんかは世代的にも日本が戦争に負けたことを非常に重く受け止めているんですよね。もし日本が勝っていても、ジャズを聴く人はいたんでしょうけど、終戦後にアメリカ軍が日本に入って来て、その副産物としてジャズが日本でも広まったと思うんです。当時はジャズを演奏している日本人を馬鹿にするアメリカのミュージシャンたちもいましたけど、自分たちの音楽を取られちゃったみたいな感じに思っていたんでしょうね。日本人はいいオリジナリティを持っていますし、一緒になって強調し合って、伴奏の時も休まないで、結局演奏の邪魔をしてしまうようなこともある向うの人たちにはない、日本独特の“間”ってありますよね？　日本の音楽の素晴らしさは、浪曲等を聴けば分かりますが、何か言っておいて休むんです。そのセンスって外国人には分からないですよ。だから、僕も和のものを弾くようにしていますし、日本の演歌だって馬鹿にならないですよね。そういう意味でも、日本人がみんな持っているものを大切にしながら、ジャズを勉強しなきゃいけないですよね。あと、みんなジャズを芸術だと思っちゃったんですよね。もっともっとエンタテイナーが必要だし、ジャズの曲だからとかそんなことは関係ないと思いますね。エロール・ガーナーでもジャズの曲をやらないですよね。ウィントン・ケリーも「朝日のようにさわやかに」とか、あれは元々タンゴですからね。それをまた真似しちゃったらダメなんですけど、音楽は“歌”ですし、音数やスタイルじゃなく、個性が大事で、ジャズというのは即興、その瞬間その瞬間のオリジナリティが大事なんですよね。日本人は才能があるんですから、自分なりに曲を選んで、オリジナリティを大切に演奏するような、そういうセンスのいい人が出て来ないとダメだと思いますし、日本の音楽、日本人の楽器演奏がもっと海外に出て行かなきゃいけないと思うんです。いや～、楽しみですよ。僕たちの世代と比べて、今の人たちは食べものも違いますもんね（笑）。

♪菅野さんにとってピアノとは何ですか？

世の中で僕が一番ピアノを触ったやつじゃないかなって思いますね。誰にも負けない、誰にも負けたくないという気持ちもあります。僕には 3 つ年上の兄貴がいるんですけど、小さい頃に兄貴がおやじにせがんで、家にピアノが来たんです。まだ「ヤマハ」やそれ以前の「日本楽器」もない頃でした。

インタビュー当日、茅ヶ崎の『ハイハット』でソロ・ピアノを弾く菅野さん

僕は小さい頃すごい悪ガキで、兄貴の持っている電気機関車だとか、おもちゃとか何でも全部壊してしまったんですよ。それで、兄貴はピアノを壊されちゃかなわないっていうんで、2 年半部屋に鍵を掛けて、僕にピアノを弾かせてくれなかったんです（笑）。それが引き金になったんでしょうね。家にピアノがあるのに弾けないから、友達の家に行ってピアノを触り出したんです。それがピアノを始めたきっかけですね。

♪最後に菅野さんの夢は何ですか？

“未来鍵盤”をもっと皆さんに聴いて頂きたいこともそうですけど、皆さんがもっとたくさんジャズと触れて、ジャズを真剣に聴いて、自分のジャズ、本当の音楽の姿勢を学んで欲しいですね。

インタビューが行われたのは、茅ヶ崎のジャズ・カフェ『ハイハット』。ちょうど菅野さんのソロ・ピアノのライヴの日で、1st ステージではカーペンターズの「クロス・トゥ・ユー」やボサノヴァの名曲「イパネマの娘」。2nd ステージでは飛び入りで参加した女性ジャズ・ヴォーカルと「サマータイム」や「黒いオルフェ」を共演。「ハウ・ユー・メット・ミス・ジョーンズ」や「フライ・トゥ・ザー・ムーン」も素晴らしく、菅野さんならではのオリジナリティ溢れるビートルズ・ナンバー「サムシング」と「アンド・アイ・ラヴ・ハー」も最高だった。

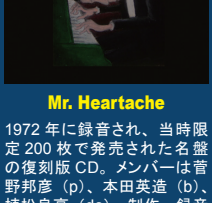
MC では大のジャズ・ファンであるロシア大統領プーチンに纏わるロシアでの演奏プランが 9.11 のテロでボツになった話。ブラジルで田中角栄に遭遇し、当時角栄さんがブラジルで土地をいっぱい買い漁っていた話。老舗ジャズ・クラブ『ミスティ』の初代ピアニストとして、ニューヨークで菅野さんが選んだ当時の値段で 1000 万円以上したニューヨーク・スタンウェイのフル・コンサートを知り合いだった JAL カーゴの支社長に頼み込んで、空圧による破壊を覚悟しながら空輸してもらった時の話も面白かった。

そして、何よりもスペシャルだったのは、1st ステージのラストでリロイ・ヴィネガーと共演した菅野さんのアルバム『エスタテ』からのナンバー「真夜中の太陽は沈まず」を演奏して頂いたこと。大感謝＆大感激でした。

菅野邦彦公式サイト : http://suganokunihiko.com/

The Early Days

初期のレコーディングの中から菅野邦彦自選の 8 曲を収録。菅野さん曰く、最初の 4 曲は初演のロックバンドの音源で、この音源を聴いてローリング・ストーンズがコピーした感があるとのこと。必聴の音源です！



Mr. Heartache

1972 年に録音され、当時限定 200 枚で発売された名盤の復刻版 CD。メンバーは菅野邦彦（p）、本田英造（b）、植松良高（ds）。制作、録音は菅野さんの兄である菅野沖彦氏が担当。全 9 曲収録。

菅野さんの CD、その他に関するお問い合わせは
菅野邦彦後援会代表　青山敬之助さんまで。
aoimaru@kbd.biglobe.ne.jp